OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	Semantic Structures of Psychological Predicates : With Special Reference to Japanese Psychological Verbs
Author(s)	板東, 美智子
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/41322
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【3】

氏名	板東 美智子（ばんどう みちこ）
博士の専攻分野の名称	博士（言語文化学）
学位記番号	第 14765 号
学位授与年月日	平成11年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	Semantic Structures of Psychological Predicates:With Special Reference to Japanese Psychological Verbs （『心理述語の意味構造—日本語の心理動詞を中心に—』）
論文審査委員	（主査） 教授 郡司 隆男 （副査） 教授 今井 光規　助教授 三藤 博

論文内容の要旨

我々が持つ言語の知識は，音韻的知識，統語的知識，そして，意味的知識に大別されると言われている。それらの言語知識を普遍文法（Universal Grammar－UG）と呼び，それを解明しようとするのが，本論文が依拠する基本的立場，生成文法理論である。生成文法理論には様々な立場があるが，それらは次のように二分されるであろう。一方は，文が語彙の情報と，自律した統語構造とその形式的な特徴のみによって決定され，その文が持つ音韻や意味は統語構造決定後，派生される，と仮定するミニマリスト・プログラム（Chomsky, 1995）の立場と，もう一方は，語彙に関して，音韻的知識，統語的知識，そして，意味的知識が方向性を持たず並列的に存在し，相互に情報を共有し合うと仮定する，主辞駆動句構造文法（Head-Driven Phrase Structure Grammar－HPSG, Pollard and Sag, 1994），同様に語彙情報に基づき，３つの知識の自律性と並列性を主張する，Tripartite Parallel Architecture（Jackendoff, 1997）等の立場である。

本論文は，以下で一例を挙げる特徴から，生成文法理論の後者の立場をとりながらも，語彙的情報だけでなく，語彙と文の双方の情報の必要性を主張するものである。特に，語彙と文の意味構造の特徴と，意味構造と統語構造とのつながり（構成性）の普遍性を記述し，形式化しようとする試みである。

扱う現象には，普遍文法を記述する際に問題とされてきた，一部の感情を表わす動詞の特異な振る舞いを，本論文で仮定する文の意味構造の必要性をよく示すものとして取り上げた。その動詞を特に「心理動詞（psych-verbs）」と呼び，主に，日本語の心理動詞を中心に考察した。例えば，「驚く」は共起する名詞句によって，受身形になる場合（1b）と，ならない場合（1d）がある。

(1) a．赤ちゃんが電話のベルに驚いた。
　 b．*電話のベルが赤ちゃんに驚かれた。
　 c．みんなが彼の発言に驚いた。
　 d．彼の発言がみんなに驚かれた。

また，(2)の例文はいずれも使役関係の意味を持つ他動詞の文であるが，過去形にして，結果状態をキャンセルできるものとできないものがある。

(2) a．*太郎は花瓶を壊したが，花瓶は壊れなかった。

b．*母親は子供に服を着せたが，子供は服を着なかった。

（cf．母親は子供に服を着させたが，子供は服を着なかった。）

c．健は奈緒美を驚かしたが，奈緒美は驚かなかった。

（cf.*その事件は奈緒美を驚かせたが，奈緒美は驚かなかった。）

d．花子は風邪薬を水に溶かしたが，薬は溶けなかった。

「壊す」，「着せる」，「驚かす」，「溶かす」という語彙の情報だけでは，項の数と，原因となる事象がある結果状態を引き起こす，という使役関係の意味しかわからないが，それらの動詞と具体的な名詞句が組み合わされ時制が決定されると，結果状態に関して，振る舞いの違いが明確になってくることが観察される。

更に，「驚く」は「－させ」の使役形態素を付加して複合使役動詞を形成することができるが，その複合使役動詞には照応詞「自分」の先行詞に関して，(3a, b) のような対立がある。

(3) a．*自分$_i$の子供が計画的に花子$_i$を驚かせた。

b．自分$_i$の子供の合格が花子$_i$を驚かせた。

「驚かせる」の文は，意図的な動作主の主語のなかに「自分」を持つと，通常と同様，右の要素（この例文では「花子」）をその先行詞としてとることはできないが，非意図的な出来事主語が「自分」を持つ場合は，それが可能になるのである。

上記は全て，語彙（動詞）の情報と表層上の統語構造ではその文法性の違いを説明できないことを示す例である。本論文では動詞とそれがとる名詞句自体の特徴，アスペクト，テンス，全てが決定して初めて振る舞いが異なってくることを観察する。これらの全ての情報が決定された文は，その文に対応する統語構造と意味構造があり，それらの特徴と相互関係によってのみ説明される現象であると考え，言語知識として，語の意味構造だけでなく，文にも対応する意味構造があることを主張する。文の意味構造の形式化の手法としては，ミニマリスト・プログラムにおける論理意味表示のように，関数とその変項（量化子がある場合は，その関数と変項を作用域にとる演算子が表示される）で表示されてきた。しかし，上記の例はそれだけでは不十分であることを示している。また，論理意味表示では，アスペクトやテンスは記載されなかった。以下では，こういった不十分な点を解消するメカニズムを組み入れた本論文の文の意味構造が，どのように上記の心理動詞の特異な振る舞いを分析し，説明するかについて，その要点を章構成に従って述べる。

まず，第2章で，特異な特徴を示す日本語の心理動詞を，それらがとる名詞句の種類と格助詞の分布によって，4つのグループに分類する。それらの名詞句の特徴を抽出するテストとして，受身化の可否，「原因」の意味をあらわす助詞「で」との交替の可否，使役化の可否を用いる。

第3章では，本論文で提案する基本的な意味構造のモデルと，用いる用語の定義を示す。語の意味構造には Jackendoff (1990) で提唱された，動詞を意味関数と変項で表す Lexical Conceptual Structures (LCS) を基本的に用いるが，そのLCSには，項の統語的情報 argument structure (ARG-ST)，Reichenbach (1947) で提唱された Sequence of time の Event time (ET)，そして，Pustejovsky (1995) で提唱された Event Headedness の概念（複数の下位事象から成る出来事はどの下位事象に焦点が置かれるかが語彙部門で規定されているとする仮説）も記載されていると仮定する。更に，Igarashi and Gunji (1997) のアスペクト表示にならって，文で実現され得るアスペクトの候補は全て，語彙部門で揃っているとする。例えば，ある瞬間の動作 (event) を表す動詞に「－ている」が付いて結果状態 (state) を示す場合，語彙部門では，その動詞には event の LCS と，state の LCS が存在すると考える。

文の意味構造として Compositional Propositional Structure (CPS) と呼ぶ構造を提案する。CPS では LCS のうち head をもった下位事象の ET に対してテンスを固定し，それを Reference time (RT) として表示する。また，LCS の変項は名詞句の CPS に置き換わり，文全体の意味を表示する。LCS，CPS と統語構造間との関連性を図1で

示す。

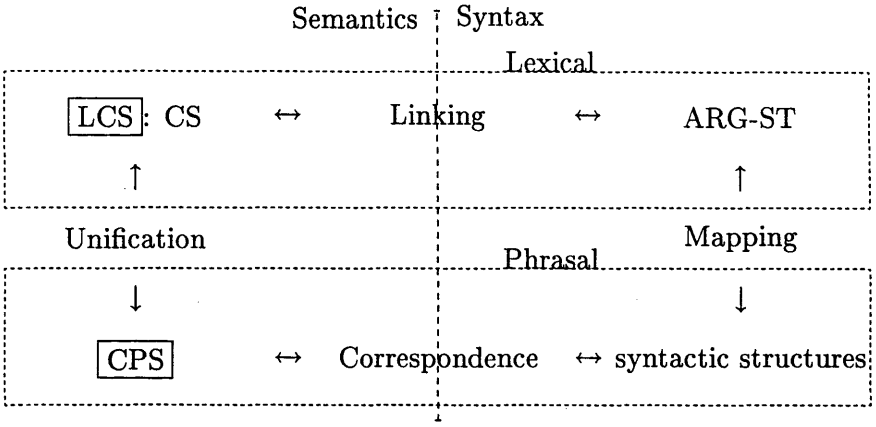

図 1: Basic Organization

第 4 章以降では，具体的な例文の分析に入る。第 4 章では，第 2 章での分類に従い，特に自動詞の「驚く」「喜ぶ」の例を扱う。自動詞の「驚く」にはその感情の経験者の能動的知覚を含意しない非対格の「驚く」と，その知覚を含意する非能格の「驚く」があることを仮定し，それぞれの意味構造を記述する。そしてその意味構造により，上記の受け身化の可否やアスペクト的特徴（「－ている」形の有無）を説明する。

第 5 章では，第 4 章で扱った自動詞，他動詞の使役形について論じる。使役形の語形成について，まず，先行研究の分析を概観し，日本語の心理動詞の使役形の語形成についての定義を与える。「驚かす」は語彙的使役動詞であり，語彙のレベルで，Lexical Rule によって「驚く」の LCS から「驚かす」の LCS を形成する。一方，「驚かせる」は統語的複合使役動詞であり，句のレベルで「驚く」の LCSと「－させ」の LCS の単一化（Unification）の操作によって，「NP1- が NP2- を驚かせる」の CPS が形成される。この語形成の特徴と，それぞれの CPS を記述することにより，上記の例文でみた，含意関係の対立，「自分」の照応関係の対立を説明する。特に，含意関係については，LCS の head event と，CPS の RT の固定が決定的な働きをすることを述べ，照応関係の説明には，句レベルの意味構造で照応詞の束縛関係をとらえる CPS 束縛条件（CPS Binding Conditions）を提案する。

第 6 章は，日本語と英語の心理動詞の対照を行う。先行研究における英語の心理動詞の意味的特徴の観察に基づき，その LCS，CPS を表す。次にそれらの意味構造と日本語の自動詞の意味構造とを比較対照し，共通点，相違点を挙げる。また，日本語で「驚く」が英語では 'be surprised at' のように受身形になること，日本語では複合語の「驚かせ」が英語では 'surprise' のように形態的にも単純な他動詞で表すことの意味にも触れ，日英語の対照が「する」と「なる」の対立（池上，1981）に関連付けられるかどうかを検討する。

第 7 章は，本論文の結論の章である。6 章までのまとめと，今後の課題として，(i)日英語だけでなく，他のアジアの言語やロマンス系言語の資料も範囲に入れて，本論文で仮定した意味構造の普遍性を検証すること，(ii)本論文の仮定が，心理動詞以外の動詞の特徴についても説明するかどうかを検証すること，以上の二点を挙げる。

論文審査の結果の要旨

本論文は，音韻的知識，統語的知識，意味的知識が方向性を持たず並列的に存在し，相互に情報を共有し合うとする，語彙主義の立場に立脚し，語彙的情報と統語的情報を統一的に扱う方法を提案し，その有効性を具体的に例証したものである。

扱う現象としては，本論文で仮定する文の意味構造の必要性をよく示すものとして「心理動詞」と呼ばれる，感情を表わす動詞に注目し，主に，日本語の心理動詞を中心に考察している。第 1 章の導入に続く第 2 章では，日本語の

心理動詞を，それらがとる名詞句の種類と格助詞の分布によって，4つのグループに分類している。第3章では，基本的な意味構造のモデルと，用いる用語の定義を示している。第4章では，自動詞の「驚く」「喜ぶ」を中心とした分析を示し，第5章では，これらの自動詞と，他動詞の使役形について論じている。第6章で日本語と英語の心理動詞の対照を行い，第7章は結論である。

現象

「驚く」のような心理動詞は，次に見るように，共起する名詞句によって，受身形になる場合（1a）と，ならない場合(1b)があることが指摘されている。

(1) a．彼の発言がみんなに驚かれた。
　b．*電話のベルがみんなに驚かれた。

また，よく似た形であるが，「驚かす」と「驚かせる」には，過去形にして，結果状態の含意を打ち消せるか打ち消せないかという対立がある。

(2) a．健は奈緒美を驚かしたが，奈緒美は驚かなかった。
　b．*その事件は奈緒美を驚かせたが，奈緒美は驚かなかった。

上の対立は，「驚かす」は意図的な動作主しか主語としてとれないが，「驚かせる」の主語は非意図的な出来事であってもよいという違いに関係している。この違いは，両方の主語をとり得る「驚かせる」と共起する照応詞「自分」の先行詞に関しても，次のような対立を見せる。

(3) a．*自分$_i$の子供が（「わっ」と）花子$_i$を驚かせた。
　b．自分$_i$の子供の合格が花子$_i$を驚かせた。

上記は全て，語彙情報と表層的な統語構造のみではその文法性の違いを説明できないことを示す例である。本論文では，動詞がとる名詞句自体の意味的特徴，およびアスペクト，テンスが複合的に絡み合ってこれらの振舞いが説明できることを主張している。

基本的前提

本論文では，基本的な意味構造のモデルとして，Jackendoff によって提唱された，動詞を意味関数と変項で表す語彙概念構造（LCS）を用いている。それに，テンス情報を追加し，さらに，Pustejovsky によって提案された，複数事象の中で焦点が置かれる主事象という概念も採用している。また，LCS から出発して，主事象のテンスが決定され，変項が統語構造中の名詞句と単一化してできる，文のレベルの表示を，構成的命題構造（CPS）と名付け，CPS は構成性の原理によって，主辞駆動句構造文法（HPSG）に基づく統語構造に基づいて計算されるとしている。

現象の分析

自動詞の「驚く」には，その感情の経験者の能動的知覚を含意しない非対格の「驚く」と，その知覚を含意する非能格の「驚く」があることを仮定し，それぞれの意味構造を設定している。そしてその意味構造により，上記(1)の受け身化の可否（非能格は可，非対格は否）やアスペクト的特徴（「～ている」形の有無）が説明される。

使役形の語形成については，日本語の心理動詞の使役形の語形成について2通りがあることを指摘している。「驚かす」は語彙的使役動詞であり，語彙のレベルで，語彙規則によって「驚く」の LCS から「驚かす」の LCS を形成する。一方，「驚かせる」は統語的複合使役動詞であり，句のレベルで「驚く」の LCS と「させ」の LCS の単一化によって，「NP_1がNP_2を驚かせる」の CPS が形成されるとする。この語形成の特徴と，それぞれの CPS を計算

することにより，上記の(2)の例文でみた，含意関係の対立，(3)の「自分」の照応関係の対立が説明される。特に，含意関係については，LCS の主事象と，CPS の参照時点の固定が決定的な働きをすることを述べ，照応関係の説明には，句レベルの意味構造で照応詞の束縛関係をとらえる CPS 束縛条件を提案している。

さらに，日本語と英語の心理動詞が対照的に分析され，英語の心理動詞の LCS と CPS を与え，それらの意味構造と日本語の自動詞の意味構造とを比較している。また，日本語の「驚く／驚かせる」という自動・使役という関係が，英語では 'be surprised／surprise' のように，受動・他動という関係になることの意味にも触れ，そこから，いわゆる「する」と「なる」の対立を原理的に説明する可能性を示唆している。

総評

本論文の価値は，語彙的意味情報と，テンス・アスペクトなどの，統語構造と連動して定まる構文的意味情報とを統一的に扱う方法を具体的，かつ，十分に形式的な記述に基づいて示したことにある。これにより，統語的な主語の意味的性質を動詞のもつ語彙的な意味情報と結びつけることが容易になり，動作性の主語と出来事をあらわす主語の違いが文全体の意味にどのように影響するかを明示的に示すことができている。

もちろん，いくつかの未解決の問題は残っており，形式化が不十分な点も見られる。また，例証のための作例による例文の吟味，採用する形式化に対する説得的な裏付け，論文の論理的な構成などについても，不満足な点はある。今後は，研究方法をさらに広げて，コーパスからの実例の採取なども検討する必要があろう。また，不十分ながら英語の分析にも手をつけているが，理論的枠組が一般的である以上，今後，日英語の対照的研究はもちろん，広く世界の諸言語について普遍性を立証することがさらに必要であると思われる。

しかし，全体としては，束縛の扱いなど，心理動詞に限らず一般化できる可能性がうかがわれる箇所もあり，本論文は，今後が期待されるところが数多く見られる発展性を十分にもった論文であると高く評価できる。

以上の諸点から，本論文はこの分野の第一線の研究の水準に達している優れたものであり，博士（言語文化学）の学位請求論文として十分に価値のあるものと認められる。